

ある商家のコレクション

書画 (しよが) と掛袱紗 (かけふくさ)

会期◆令和 3 年 3 月 23 日(火)~4 月 18 日(日) 会場◆八代市立博物館未来の森ミュージアム

第1章 肥後の書画(しよが) 解説:石原(No.1-9)、林(No.10)

平岡家は、八代市本町3丁目に居を構える商家でした。同家には、近代の当主が収集した書画コレクションがあり、床の間の掛軸を毎月掛け替え、書画で季節を感じる暮らしを楽しんでいます。

コレクションは、郷土の作家はもとより、江戸や京都の作家の作品で構成されています。細川重賢直筆の書を筆頭に、細川家の御用絵師による漢画、幕末から近代にかけて流行した南画、また岸部梅船(安養寺住職)や津々良一如(本成寺住職)など八代の画僧による書画など、商家ならではの自由な選択眼によって収集されました。

1 平岡家初代武八肖像 馮鏡如筆(1822-94) 明治 16 年(1883) 絹本着色 掛幅装 3 幅対

平岡家の「隅立て井筒紋」が付いた羽織をまとった初代武八の肖像です。3 代目保行が、商売先の長崎在住画家・馮鏡如に制作を依頼、平岡家ではこれを正月に掛けて先祖とともに新年を祝いました。馮鏡如は、中国清時代の 1822 年、嶺南(広東省)に生まれ、明治 10 年代から 20 年代にかけて長崎に来往した画家です。左右の漢詩も馮鏡如の作で、平岡家の繁栄を讃えています。



2 細川重賢書「明月」 細川重賢筆(1721-85) 江戸時代 紙本墨書 掛幅装 1 幅

筆者の細川重賢は、6代熊本藩主です。享保 5 年(1721)生まれ、兄の急死で藩主となり、藩の財政を立て直し、藩校「時習館」、医学校「再春館」を設立するなど、宝暦の改革を成功させました。重賢は、文芸や博物学にも造詣が深く、儒学者の秋山玉山から漢学を学び、自ら漢詩を作るほどでした。天明 5 年(1785)66 歳で没。



3 羅漢に龍図 岸部梅船(1620-1706) 江戸時代 紙本墨画淡彩 掛幅装 1 幅

岩に腰かける羅漢(悟りをひらいた聖人)が、凶暴な龍を手なづけ、その耳を撫でています。筆者の岸部梅船は、元禄 6 年(1620)安養寺(八代市本町 3 丁目)2 世。絵を好み、延宝 2 年(1674)、55 歳のとき江戸の狩野洞雲(探幽養子)に絵を学びました。元禄 9 年(1696)、78 歳の時、日本の絵師の伝記をまとめた辞書『図書考略記』を著し、全国にその名を知られるようになりました。宝永 3 年(1706)88 歳で遷化(僧の死)。



4 富士図 狩野周信(1660-1728)筆 江戸時代 絹本墨画淡彩 掛幅装 3 幅対

3 幅の掛軸を一つの画面とし、中央に霊峰富士、右下に三保の松原、左下に清見寺を描きます。筆者の狩野周信は、狩野常信の長男として生まれ、木挽町狩野を継ぎ、江戸城の障壁画を描くなどの実績を残しました。享保 13 年(1728 年)69 歳で没。肥後との直接的な関係はありませんが、松井文庫に父常信の作品が 3 点伝来します。



5 曲水宴図

山口雪溪 (1644 - 1732) 筆 江戸時代 絹本着色 掛幅装 1 幅

「曲水宴」とは、水の流れのある場所で、上流から流れてくる盃が自分の前を通り過ぎるまでに歌を詠み、盃の酒を飲んで次へ流す宴。筆者の山口雪溪は、京都生まれの絵師。はじめ狩野派に学び、のち雪舟、牧溪を慕い、自ら「雪溪」と名乗りました。八代市立博物館が所蔵する西山宗因の肖像画も山口雪溪の作です。享保 17 年(1732)88 歳で没。



6 鷹図

森徹山 (1775-1841) 江戸時代 絹本着色 掛幅装 1 幅

鷹の姿を細部まで観察した精緻な描写が見事です。筆者の森徹山は、安永 4 年(1775)、森狙仙の兄周峰の子として大坂に生まれ、のちに狙仙の養子となりました。円山応挙に絵を学び、父子共に写実描写の優れた動物画で一世を風靡しました。森派は、父狙仙の時代から代々肥後細川家の御絵師をつとめ、松井家にも森派の名品が多数伝来します。天保 12 年(1841)67 歳で没。



7 巖上蛭子図

杉谷雪樵 (1827-95) 筆 近代 紙本墨画淡彩 掛幅装 1 幅

蛭子(恵比須)は、七福神の一つ、日本の民間信仰の神です。右手に釣竿、左手に鯛を抱え、豊漁の神とされますが、商家では商売繁盛の神として尊崇されています。筆者の杉谷雪樵は、文政 10 年(1827)、矢野派の絵師・杉谷行直の子として生まれました。矢野良敬に学び、細川家最後の御用絵師として活躍しました。明治 28 年(1895)69 歳で没。



8 後醍醐天皇笠置山行宮図

津々良一如 (1846-95) 筆 明治時代 絹本着色 掛幅装 1 幅

討幕計画が漏れて笠置山(京都府相楽郡)に行宮(仮の宮殿)を置いた後醍醐天皇が、夢のお告げに従い楠木正成を呼び寄せ、正成もまた討幕の兵をあげるといふ『太平記』の場面です。筆者の津々良一如は、弘化 3 年(1846)、現在の阿蘇市坂梨生まれの日蓮僧。八代・本成寺住職をつとめ、明治 28 年(1895)49 歳で遷化(僧の死)。一如は、和歌や長歌を詠み、土佐派風の絵を描く文化人でもありました。



9 弓術書

上羽又兵衛(生没年不詳)筆 文政 5 年(1822) 紙本墨画 卷子装 2 巻

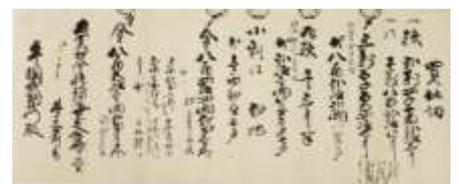
近世以降の弓術の主流である吉田流についてまとめた「弓術書」のうち、矢羽・矢の根・的絵の種類と名称を描いた「矢羽図」「矢の根図」「的絵図」が平岡家に伝来します。巻子の奥書きから、本図は、熊本藩射術六家のひとつ「吉田流射術」の前川忠左衛門と前川喜右衛門によって書写された秘伝書を、文政 5 年(1822)、肥後宇土支藩の家臣・上羽又兵衛が、再度書き写したものだと思われます。



10 仕切状

幕末～明治初期 卷子装 1 巻

仕切状とは、商品の売買に際し、商品名と数量、代金と手数料の明細を記したものです。平岡家には、長崎西濱町の商人井戸屋利兵衛が出した仕切状が残されています。これによると平岡家 2 代目の武左衛門(武十郎)は、井戸屋を介して鉄 35,547 斤(約 21 トン)を買い取り、その代金として金 851 両(現在の価値に換算すると約 1 億円)を支払っています。また、椎茸 186 箱(9,212 斤・約 5.5 トン)を売り、その代金として金 2,330 両(現在の価値に換算すると約 3 億円)受け取っています。



第2章 掛袱紗(かけふくさ)と幟旗(のぼりばた) 解説:早瀬

掛袱紗は、婚礼や長寿の祝いの際にお祝いの品の上に掛けた覆いです。

江戸時代後期には、武家方の風習が裕福な町人の間にも広がって進物に袱紗をかけて贈るようになり、刺繍や染め、織など様々な袱紗が作られるようになりました。

一方、幟旗には、歌舞伎などの興行や神社の祭礼、大売り出しなどの商業用の旗の他に、男の子の初節供(初めて迎える端午の節供)に親戚などから贈られたものがあります。勇ましい武者絵や縁起のいい松竹梅・鶴亀などが染められた幟旗には、子供の健やかな成長を願う気持ちが込められています。

【出品リスト】

No.	名 称	員数	No.	名 称	員数	No.	名 称	員数
11	掛袱紗(浦島太郎)	1点	12	掛袱紗(孟宗)	1点	13	掛袱紗(高砂)	1点
14	掛袱紗(高砂)	1点	15	掛袱紗(紅葉賀)	1点	16	掛袱紗(松竹梅)	1点
17	掛袱紗(扇面)	1点	18	掛袱紗(松竹梅・鶴亀)	1点	19	掛袱紗(宝尽し)	1点
20	掛袱紗(隅立て井筒紋)	1点	21	掛袱紗(隅立て井筒紋)	1点	22	掛袱紗(隅立て井筒紋)	1点
23	幟旗(松)	1点	24	幟旗(竹)	1点	25	幟旗(梅)	1点
26	幟旗(加藤清正虎退治)	1点	27	幟旗(翁)	1点	28	幟旗(媪)	1点
29	木馬子供衣装	一式	30	木馬(特別出品)	1点			



No.11 掛袱紗(浦島太郎)

浦島太郎は、^{とうほうさく}東方朔・三浦大介義明(源頼朝の家臣)と共に長寿三老の一人とされています。



No.13 掛袱紗(高砂)

謡曲「高砂」の高砂と住吉の松の精である老夫婦をモチーフとしたものです。「^{あいおい}相生の松」とも呼ばれ、縁結びや夫婦和合、長寿の象徴とされています。

No.12 掛袱紗(^{もうそう}孟宗)

雪の竹林で筍を掘るのは、中国の孝行話を集めた『^{にじゅうしこう}廿四孝』に登場する孟宗という人です。孟宗は、冬に筍を食べたがった病身の母のために竹林に探しに行きます。しかし、冬に筍が見つかるはずもなく、嘆き悲しんでいたところ、その孝行心が天に通じたのか筍が生えてきました。孟宗は、無事母に筍を食べさせることができ、病が癒えた母は天寿を全うしたという話がモチーフになっています。



No.26 幟旗(加藤清正虎退治)



朝鮮出兵の際に加藤清正が虎狩りをしたことは良く知られています。虎の肉は滋養があるとされていたため、清正だけでなく、他の武将たちも虎狩りをし、豊臣秀吉に虎の肉や皮を届けました。

虎退治といえば清正と言われるようになった訳はよくわかっていません。しかし、武運の強かった清正の武勇から、菖蒲＝尚武(武勇を重んじる)の節供にふさわしいと考えられて幟旗に用いられたのかもしれません。

左の写真にはありませんが、幟旗の上方の紋は、贈られた家の家紋、下方の紋は贈った家の家紋です。



贈られた家の家紋



贈った家の家紋

No.29・30 妙見祭の^{きんま}木馬と子供の衣装

木馬は、元文2年(1737)松井寿之^{ひさゆき}70歳の祝いに、家臣が1頭出し、町方より4頭出したのが始まりです。当初は「作り馬」と呼ばれていました。江戸時代後期(約200年前)の絵巻には、様々に趣向を凝らした12頭の木馬が描かれています。

展示の木馬は、明治20年代に作られたものです。親戚の家の木馬(市指定文化財)をモデルにして作られました。

木馬は、妙見祭だけでなく、浅井神社の祭礼の際にも出て、獅子舞の時に一斉に馬を揺らして鈴を鳴らしたそうです。

※浅井神社:旧八王社。妙見宮の末社(妙見宮に属する神社)でした。江戸時代の記録にも八王社の祭礼に獅子と共に木馬が出ていたことが記されています。



【参考写真】昭和27年、木馬と獅子の子ども(玉振り)



【参考写真】「妙見宮祭礼絵巻」(江戸時代後期)に描かれた木馬
八代神社所蔵